第1１課　聖霊を悲しませ、聖霊に逆らう

【暗唱聖句】

「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、聖霊により、贖いの日に対して保証されているのです」エフェソ4:30

【今週のテーマ】

聖霊はわたしたちに正しき道を示し、その道を歩む力を与え、共に伴走してくださる方です。また聖霊は聖い品性の実を与え、み言葉を悟らせ、真理へと導いてくれます。そして聖霊はわたしたちに救い主イエス・キリストを示し、永遠の命の保証として内に住んでくださる方です。だから、この聖霊を悲しませるようなことをしてはならないのです。聖霊の導きに逆らってはならないのです。しかし、聖霊は強制なさいません。人間は聖霊に逆い、聖霊を悲しませることができます。いったいそれは具体的にどういうことなのか、またその結果はどうなるのかを今週学んでいきます。

【日曜日　聖霊に逆らう】

「かたくなで、心と耳に割礼を受けていない人たち、あなたがたは、いつも聖霊に逆らっています。あなたがたの先祖が逆らったように、あなたがたもそうしているのです」使徒7:51

イスラエルの人々のかたくなさが、聖霊を拒み、逆らう結果となっていることをステファノはここで指摘しています。そしてイスラエルの先祖が主に逆らったように、まるで変っていないと言います。人間というのはそう簡単に変わることができるものではないということがわかります。それは、心のかたくなさ、神の声を聞く耳を傾けようとしないことのゆえにそうなったのでした、彼らは心の伴わない型式的な礼拝儀式に固執し、それが神様に従う正しい行為であるかのように思いこみ、結果的に聖霊のささやきさえ拒むようになってしまったのです。わたしたちにはいつでも神様の声に耳を傾け、神様の声に従う心の柔軟さが大切です。

神様によって造られた人間が神様の意志に逆らって生きることができると考えるのは驚くべきことです。神様は人間に自由の意志をお与えになりました。それはわたしたちをロボットのように造られなかったからです。だからといって、わたしたちは自分の力で正しく生きることができると思ったら大間違いです。そのことをわたしたちは理解しています。だとするならば神様のみ言葉に耳を傾け、そのみ言葉に従って生きるように努めるべきです。そうしなければわたしたちは聖霊に逆らうことになります。

教会は神様に従う人たちが集まっているところです。弱い私たちはみ言葉に従って生きることができるように、時に互いに励ましあい、支えあう必要があります。

【月曜日　聖霊を悲しませる　その1】

「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、聖霊により、贖いの日に対して保証されているのです」エフェソ4:30

ここに聖霊を悲しませてはならないと書かれてあります。それは私たちは聖霊を悲しませることがあるということでもあります。どのようなときに聖霊を悲しませてしまうのでしょうか。それは聖霊の導きを拒否し、逆らうことを通してです。聖霊の重要な働きの一つとして聖書には次のように書かれています。

「その方が来れば、罪について、義について、また、裁きについて、世の誤りを明らかにする」ヨハネ16:8

聖霊の声を拒むということが何を意味するのかというと、それは罪についての指摘を拒むということ、義についての教えを拒むということ、裁きや世の誤りについて明らかにされたことを拒むということを意味します。また、エフェソ4:30より前に書かれてあった事柄を見ると、4:2～3には「一切高ぶることなく、柔和で、寛容の心を持ちなさい。愛をもって互いに忍耐し、平和のきずなで結ばれて、霊による一致を保つように努めなさい」と書かれてありますが、このように聖霊は導いてくれるのです。しかし、高ぶりの心に支配されたり、人を裁く心で支配されたりして、ここに書かれてある事柄から脱線してしまうことでしょう。またエフェソ4:31を見ると「無慈悲、憤り、怒り、わめき、そしりなどすべてを、一切の悪意と一緒に捨てなさい」とあるので、逆にこれらのことをするときに聖霊を悲しませることになります。

その結果どうなってしまうのでしょうか。「聖霊により、贖いの日に対して保証されている」救いを失いかねないということです。聖霊がその人のもとにいれなくなってしまうからです。それゆえ、聖霊を悲しませてはならないのです。

【火曜日　聖霊を悲しませる　その２】

では、聖霊を喜ばせることはできるのでしょうか。答えはイエスです。エフェソの4章から一部を抜き出すと、

「真実を語る」こと（エフェソ4:25）。「怒ることがあったとしても、日が暮れるまで怒ったままでいなこと」（同4:26）。「盗みを働かず、労苦して自分の手で正当な収入を得ること」（同4:28）。「悪い言葉を一切口にせず、聞く人に恵みが与えられるように必要に応じて語ること」（同4:29）などが聖霊を喜ばせることになります。つまり、神様のみ旨に叶う生き方をするときに、聖霊は喜んでくださるということです。

また、エフェソ4章の中には共同体（教会）として一致していくことの大切さについても繰り返し述べられています。それは同じ霊を内に持つものとして当然のことですが、「平和のきずなで結ばれて、霊による一致を保つように努め」（エフェソ4:3）ることは、神の子として当然のことであり、それを破壊するような言動は聖霊を悲しませることです。

【水曜日　聖霊を消す】

「“霊”の火を消してはいけません。5:20 預言を軽んじてはいけません。5:21 すべてを吟味して、良いものを大事にしなさい」第一テサロニケ5:19～21

聖書は聖霊の火を消してはならないと教えています。つまり、どんなに熱く燃えている火であっても、水をかければ一瞬に消えてしまうように、聖霊を消してしまうことがあるということです。聖霊を悲しませるような生き方をわたしたちが選ぶとき、やがて神様を信じたばかりのころの熱い信仰が覚めていきます。これは聖霊の火がその人のうちで消えてしまったことを意味しています。だとするならばもう一度その火を取り戻す必要があり、それがリバイバルと呼ばれるものです。

また、この消すというギリシャ語はエフェソ6:16でも使われています。そこでは次にように出てきます。

「なおその上に、信仰を盾として取りなさい。それによって、悪い者の放つ火の矢をことごとく消すことができるのです」。エフェソ6:16

こちらでは信仰が悪い者（悪魔）の火の矢をことごとく消すことが出来ると書かれてあります。悪魔の誘惑や攻撃に勝てないとわたしたちは初めから降参してしまってはいなでしょうか。確かに自分の力で悪魔に勝つことはできません。しかし、信仰の盾をとり、聖霊の力が与えられるとき、悪魔が放つすべての火の矢をことごとく消し去ることができると聖書に約束されているのです。内住する聖霊の力によって聖い生活を、み言葉に従う生活を送る時、悪魔は私たちに手を出すことができなくなるのです。

また、パウロはテサロニケの信徒に、聖霊の火を消さない方法の一つとして「預言を軽んじてない」こととあります。そして「すべてを吟味して、良いものを大事にしなさい」と教えています。わたしたちは聖霊の働きの一つである預言を軽んじてはなりませんが、同時に偽物（偽預言者）も多くあらわれるので見分けなさいと教えられています。

偽預言者とはどのような人たちのことを言うのでしょうか。テレビに出てくるような占い師や新興宗教の教祖のような人たちだったらわかりやすいかもしれませんが、実際にわたしたちの前に現れるのはもっと普通な恰好をし、優しく聖書の教えながら真理からそれていく教えを解いてくるかもしれません。だから、わたしたちはみ言葉の光に照らしだして吟味し、見分けなければならないことがあるのです。

結局のところ、聖霊の灯を消さずに歩むとは、み言葉の教えに従って歩み、聖霊の促しにしたがってむということです。そのためにもまず聖書を読み、ことあるごとに祈ることがとても大切になります。

【木曜日　聖霊に対する冒涜】

「はっきり言っておく。人の子らが犯す罪やどんな冒涜の言葉も、すべて赦される。しかし、聖霊を冒涜する者は永遠に赦されず、永遠に罪の責めを負う。」マルコ3:28、29

この聖句ほど背筋がぞっとする聖句もないでしょう。ルカ12:10にも、マタイ12:31，32にも出てきます。聖霊を冒涜する者は永遠に赦されず、永遠に罪の責めを負うと書かれてありますが。これは一体どういうことなのでしょうか。

聖霊を冒涜する罪とは、聖霊の存在、聖霊の働きを認めず、軽視することです。イエス様が「目が見えず口の利けない人」を癒されたとき、群衆は悪霊の力によって行ったのだと攻撃しました。そのときイエス様はこう言われたのでした。

「だから、言っておく。人が犯す罪や冒涜は、どんなものでも赦されるが、“霊”に対する冒涜は赦されない。人の子に言い逆らう者は赦される。しかし、聖霊に言い逆らう者は、この世でも後の世でも赦されることがない。」マタイ12:31、32

まさに、彼らはイエス様がなさったことを批判することで、聖霊を冒涜したのでした。

聖霊はわたしたちに罪を指摘し、真理へと導きます。つまりそれは永遠の命へと導くことにほかなりません。それなのにその聖霊の声に逆らい続けるとしたならどうなるでしょう。やがて聖霊はその人を離れてしまうことでしょう。聖霊は求めるものに与えられ、拒むものからは離れるのです。